

## 「無理にでも連れて来なさい」

ルカの福音書 14:12~24

### はじめに

前回は、イエシュアがある安息日にパリサイ派の一人の指導者の家に招かれ、その時同時にそこに連れて来られた水腫をわずらっている人を癒されたという出来事について述べました。安息日に一切の労働、働くことを禁ずるパリサイ人、律法の専門家たちの前でイエシュアは癒やしの御業をなされ、彼らに安息日の意味について再度問いかけられました。しかしこれに対し彼らは沈黙し、その心と態度をご覧になってイエシュアはたとえを用いてこう言われました。「自分を高くする者は低くされ」と。この御言葉は先に語られていた「先にいる者が後になる」という御言葉の言い換え表現、つまりどちらも同じ意味を持った教えであり、一つの神のご計画を指し示していると述べました。すなわちそれは終わりの日におけるイスラエルと教会に対する救いの順序を表したものであり、本来は神の選びの民、アブラハムの子孫であるイスラエルの民すなわち先の者であるはずの彼らが後になり、本来はイスラエルにつながることによって救われる後の者であるはずの私たち異邦人の教会が彼らイスラエルよりも先に救われる、という事実、そのような神のご計画を表していると述べました。このご計画とは具体的に I テサロニケ 4:16~17 に預言された「携挙」と呼ばれる出来事と、そして聖書の随所に預言されたイスラエルの主、ダビデの子メシアの「再臨」を指し示しています。

### I テサロニケ人への手紙【新改訳 2017】

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

### ヨハネの黙示録【新改訳 2017】

19:11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確か  
で真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。

19:12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名  
が記されていた。

19:13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。

19:14 天の軍勢は白きよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。

19:15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方  
である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。

19:16 その衣と、ものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

19:19 また私は、獣と地の王たちとその軍勢が集まって、馬に乗る方とその軍勢に戦いを挑むのを見た。

19:20 しかし、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた者たちと、獣の像を拝む者たちを惑わした偽預言者も、獣とともに捕らえられた。この両者は生きてまま、硫黄の燃える火の池に投げ込まれた。

20:2 彼は、竜、すなわち、悪魔でありサタンである古い蛇を捕らえて、これを千年の間縛り、

20:3 千年が終わるまで、これ以上諸国の民を惑わすことのないように、底知れぬ所に投げ込んで鍵をかけ、その上に封印をした。その後、竜はしばらくの間、解き放たれることになる。

20:4 また私は多くの座を見た。それらの上に座っている者たちがいて、彼らにはさばきを行う権威が与えられた。また私は、イエスの証しと神のことばのゆえに首をはねられた人々のたましいを見た。彼らは獣もその像も拝まず、額にも手にも獣の刻印を受けていなかった。彼らは生き返って、キリストとともに千年の間、王として治めた。

当然のこととしてイスラエルが民族的に携挙に与ることはありません。彼らはこの携挙とほぼ同時に起こる地上の大患難を通らなければならないからです。その事実をイエシュアはここまで繰り返したとえを用いて語ってこられました。今日の箇所でも再度同じようにそれが語られています。主はなぜこれほどに同じメッセージを繰り返されるのでしょうか。それはもちろん主がこの事実を私たちに強調して伝えようとしておられることにほかなりませんが、それにはこのルカの福音書という書簡がなぜ書かれたか、なぜルカという人物によってこれが記されたのかという理由にもつながってくるものです。それではその理由を考えつつ今日の内容に入ってまいりましょう。

## 1. 招かれる者

### ルカの福音書【新改訳 2017】

14:12 イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晚餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどと呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。

14:13 食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。

14:14 その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

イエシュアは「ご自分を招いてくれた人」すなわちパリサイ人の指導者および律法の専門家たちに向けて語っておられるように見えますが、彼らがこれを聞かず、従わない、つまりこのようなことが起こらないことはイエシュアはよくご存じです。ですからこれもまたたとえなのです。ここでの「貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招き」「あなたは幸いです」と言われる存在とは、実は主イエシュアご自身を指しており、わたしはこのように行う、とユダヤ人の指導者たちに対して神のご計画をたとえを用いて宣言しておられるのです。この招かれる人々についてのヘブル的解釈を述べますと

①「**貧しい人たち**」…ここには「苦悩」という意味のオニー(אָנִי)が使われており、これは本来、アブラハムの側女のハガルの「**苦しみ**」を聞かれた主が、イシュマエルという子を与えると言われた場面で使われた言葉です(創世記 16:11)。

②「**からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たち**」これらはみな同じで、以下の掟に触れる者たちです。

#### レビ記【新改訳 2017】

21:16 主はモーセにこう告げられた。

21:17 「アロンに告げよ。あなたの代々の子孫のうち、身に欠陥のある者はだれも、神のパンを献げるために近づいてはならない。

21:18 だれでも、身に欠陥のある者は近づいてはならない。目の見えない者、足の萎えた者、あるいは手足が短すぎたり長すぎたりしている者、

21:19 足や手の折れた者、

21:20 背の曲がった者、背のきわめて低い者、目に濁りのある者、湿疹のある者、かさぶたのある者、鞆丸のつぶれた者などである。

21:21 祭司アロンの子孫のうち、身に欠陥のある者はだれも、主への食物のささげ物を献げようと近寄ってはならない。彼の身には欠陥があるから、神のパンを献げるために近寄ってはならない。

21:22 しかし神のパンは、最も聖なるものであっても、聖なるものであっても食べることが許される。

このように、イエシュアが言われた招くべき人々とは、イシュマエル人、または汚れた、呪われた者を意味し、イスラエルの民として認められない者、すなわち私たち異邦人を指しています。イエシュアはこのたとえによってまず異邦人を花婿イエシュアの花嫁なる教会として先に救われることを述べておられるのです。それが「**友人、兄弟、親族、近所の金持ちなど**」ではなく「**貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい**」とたとえられたイエシュアの御言葉に秘められた神のご計画、「神の国の奥義」です。

そして「**幸い**」な人であるイエシュアは「**義人の復活のときに、お返しを受ける**」ともあります。この「**お返し**」という意味で使われているシャーレーム(שָׁלֵם)は「完全な、安全な」という意味の言葉ですがそれは本来、「サレムの王メルキゼデク」という人物を指しており、この王はアブラハムが戦いに勝利し、親類の口と奪われたすべての財産を取り戻した時、なんの脈絡もなく突如として現れ、彼を祝福しました。

#### 創世記【新改訳 2017】

14:16 そして、アブラムはすべての財産を取り戻し、親類の口とその財産、それに女たちやほかの人々も取り戻した。

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

14:20 いと高き神に誉れあれ。あなたの敵をあなたの手に渡された方に。」アブラムはすべての物の十分の一を彼に与えた。

ですからこのシャーレームという言葉には「奪われた口を取り戻す」という事実を指しており、またそれは「型」として、メルキゼデクのような王なる祭司であるイエシュアが異邦人を、花嫁なる教会として取り戻すという神のご計画を指し示しており、それはすなわち携拳の時を表しているのです。携拳とはすなわちよみがえり、復活のことであり、死につながれていたキリストの死者たちが、永遠のいのちの源泉であるイエシュアによってまさに取り戻されることです。ちなみにメルキゼデクが持って来た「パンとぶどう酒」は聖餐、まさに聖なる食卓に招かれることを意味しますし、またアブラハムの親類口は「正しい人、義人」と呼ばれており（ペテロⅡ2:7）「義人の復活のとき」とたとえられたイエシュアの御言葉とも見事につながっています。まさに口のような義人とされた異邦人が、イエシュアによってよみがえられ、引き上げられ、取り戻され、天の食卓、天の聖餐に招かれるのです。

## 2. 断る者たち

ルカの福音書【新改訳 2017】

14:15 イエスとともに食卓に着いていた客の一人はこれを聞いて、イエスに言った。「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう。」

14:16 するとイエスは彼にこう言われた。「ある人が盛大な宴会を催し、大勢の人を招いた。

14:17 宴会の時刻になったのでしもべを遣わし、招いていた人たちに、『さあ、おいでください。もう用意ができましたから』と言った。

14:18 ところが、みな同じように断り始めた。最初の人是这样言った。『畑を買ったので、見に行かなければなりません。どうか、ご容赦ください。』

14:19 別の人はこう言った。『五くびきの牛を買ったので、それを試しに行くところです。どうか、ご容赦ください。』

14:20 また、別の人はこう言った。『結婚したので、行くことができません。』

14:21 しもべは帰って来て、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、そのしもべに言った。『急いで町の大通りや路地に出て行って、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、目の見えない人たち、足の不自由な人たちをここに連れて来なさい。』

14:22 しもべは言った。『ご主人様、お命じになったとおりにいたしました。でも、まだ席があります。』

14:23 すると主人はしもべに言った。『街道や垣根のところに出て行き、無理にでも人々を連れて来て、私の家をいっぱいにしなさい。』

14:24 言うておくが、あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません。』

またしても食卓を用いたイエシュアのたとえが語られています。本当にイエシュアはここまで立て続けに同様のたとえを微妙に状況を変えながらも連発しておられます。少し振り返ってみましょう。

ルカの福音書【新改訳 2017】

13:29 人々が東からも西からも、また南からも北からも来て、神の国で食卓に着きます。

13:30 いいですか、後にいる者が先になり、先にいる者が後になるのです。」

14:8 「結婚の披露宴に招かれたときには、上座に座ってはいけません。あなたより身分の高い人が招かれているかもしれません。

14:11 なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

「後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」「自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされる」そしてここでは「招待された者は断り、招待されなかった者が連れて来られる」というものになっています。これらのたとえの意味はすべて同じで、いずれもイスラエルの異邦人の救いの順序が表されていますが、御言葉ですからここもじっくり味わってみましょう。ここには宴会の招待を断った三人のその理由が記されていますが、これにも意味が秘められています。

①「畑を買ったので、見に行かなければなりません」

この「畑」はまだ何も生えていないただの土地、野です。この人はこの畑を耕し、種を蒔こうとしているのです。これは福音を宣べ伝える人を表しています。

②「五くびきの牛を買ったので、それを試しに行く」

「五」という数はモーセ五書、トラーともよばれる、おもに創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記に記されたイスラエルに対する神の教え、戒め、律法を指します。これと「くびき」でつながれた「牛が試される」とは、イスラエルの主だけを拝み、主の教えだけに聞き従う人が、患難の中でその信仰が試されることを表しています。

③「結婚したので」

私たち教会はメシアであるイエシュアの花嫁と呼ばれますが、それと同じようにイエシュアをメシアとして信じ、受け入れる人を表しています。

これら三つの条件を兼ね備えた存在が、私たち異邦人の教会が携拳される時、地上に起こされます。それが「イスラエルの残りの者」と呼ばれる 144,000 人のユダヤ人たちです（黙示録 7:4）。彼らは教会が携拳された後、その働きを引き継ぐため地上に残されます。そして反キリストによる世界的な大迫害に晒される中、これに耐え、イエシュアが宣べ伝えた御国の福音を語り、それによりさらに多くの異邦人がこの福音を聞き、そして信じ、携拳された教会だけでは「まだ席があります」とたとえられた異邦人の数を「いっぱいになさい」という主のご命令、ご計画が果たされるのです。このように、招待を断った人々とは、イスラエルの主を信じず、イエシュアを拒絶した者を表しているのではなく、たしかにかつてはそうでしたが、終わりの日、「恵みと嘆願の霊（ゼカリヤ 12:10）」を注がれ、真理に目が開かれ、激しい嘆きとともに主に立ち返り、イエシュアをメシアと信じて待ち望む者へと変えられる、額に神の印を押される（黙示録 7:4）イスラエルの民、「イスラエルの残りの者」を指し示しているのです。

イザヤ書【新改訳 2017】

10:20 その日になると、**イスラエルの残りの者**、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る。

エレミヤ書【新改訳 2017】

31:7 まことに、主はこう言われる。「ヤコブのために喜び歌え。国々のかしらに向かって叫べ。告げ知らせよ、賛美して言え。『主よ、あなたの民を救ってください。**イスラエルの残りの者**を。』

ミカ書【新改訳 2017】

2:12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、**イスラエルの残りの者**を必ず呼び集める。わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。こうして、人々のざわめきが起ころ。

このように、「**イスラエルの残りの者**」は地上における大患難の中で大いに試されるのですが、見事にその宣教の役目を果たし、やがて地上再臨されるイエシュアによって集められ、必ず救い出されます。

しかしイエシュアが今日の箇所、また一連の食卓のたとえで強調しておられることは「**あの招待されていた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいません**」という事実であり、すなわちイスラエルよりも先に異邦人が救われ、さらにイスラエルによって異邦人の救い、異邦人の完成、異邦人の救われる数が満ちることにあります。この事実の持つ意味がわかりますか？この事実に込められた主の御心がわかりますか？私たちの父なる神、イスラエルの主であられる神は、そのご自身の選びの民、宝の民、妬むほどに愛してやまないイスラエルの民をも差し置いて、私たち異邦人を先に救い、朽ちることのない身体を与え、天の御座にまで引き上げてくださろうとしているのです。本来ならば初めから見捨てられて当然の私たちがなぜ…。ここに計り知れない、まさに人知をはるかに超えた愛があるのです。このルカの福音書の筆者ルカは、おそらく聖書全 66 巻中ただ一人の異邦人の筆者です。主はあえて彼を選び、異邦人に対する神の愛を、その現れであるご計画をここに奥義として記されたのです。これが異邦人ルカによって書かれた福音書の目的なのです。そしてその神の愛とは、救いとは「**無理にでも人々を連れて来て**」とたとえられているように腕づく、カづくで一気によみがえらせ、一挙に引き上げる、極めて強引な力業です。決して優しい主の手に～♪などと歌われるような、そんなやわなものではないのです。何より敵は「死」そのものなのです。誰もが恐れ、決して抗えないこの死の力を永遠に打ち滅ぼすという、主の御力がいかに強大、絶大であるかがわかるでしょう。ですから私たちはもっともっと知らねばなりません。この神の愛を、その現れである主イエシュアによる力強い救いのご計画を。

エペソ人への手紙【新改訳 2017】

3:19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。